

宮本輝「錦繡」論 ——有馬を中心にして——

藤村 猛

はじめに

宮本輝の「錦繡」(初出『新潮』昭和五十六年十二月)は書簡体小説である。元夫婦の有馬靖明と勝沼重紀の、約一年間の計十四通の手紙のやり取りで、この小説は作られている。

現在、この種の小説が少ないのは、新潮文庫の解説で黒井千次が言うように、「二人の人間が一定の相手に対して書く手紙の形式はあまりに制約が大き過ぎ、自由に作品の世界を展開する上で障害となる要素が多過ぎ」るし、「現代の市民生活を考えてみた時、手紙の占めるウエイトは急激に減じて来ているからであろう。だが、手紙の利点は、電話やメールなどと違い、何度でもじっくりと読めることや、時間をかけた手紙のやり取りによって、かえって濃密な関係(世界)を作り得ることである。

元々、書簡は、書き手が特定の相手に発信するものであり、両者は相互の共通体験や知識の上で、時間に従って、やりとりするのが普通である。つまり、書簡体小説は(連載小説でない限り)、作者の構想で全体を俯瞰し、手紙相互の関係により、最初の構想から変

更し得る。だが、作者・宮本は、『道行く人たち』(昭和五十九年十一月)で、書簡体小説の特異さによる「文学とはまったく縁のない男と女の手紙」を書く苦しみを語る。

従来、この小説は、主人公たちの「交感」の読みが中心であった。例えば、安藤始氏は、この小説を「共に理解しながら成長していく物語」とし、「靖明が重紀と再会することから始まるこの作品は、その再会を切掛けとして始まる二人のそれぞれの〈再生〉の物語」とする^(注1)。また、酒井英行氏は、この小説を「人間存在が本来的に背負っている〈淋しさ〉を深く知った者同士の交感の物語」としている^(注2)。が、黄麗娜氏は、主人公たち「二人が互いを理解し合った」とはせず、両者には「齟齬」があると指摘している^(注3)。事実、二人には違う点も多い。

本来手紙は、書き手たちの相互理解の上で書かれるが、「錦繡」では、両者の再会までに十年間の空白があるし、場合によっては、有馬の中学生時代にまで遡るように、過去に言及する必要がある。その上、時間の経過もあってか、主人公たちが言うように、自分自身の、また相手の行動や心情をすべて理解できている訳でもない。

同様に、従来から重視される有馬の死生体験と重紀のモーツァル

ト体験にも、違いがある。なによりも、有馬は「死」を体験しているし、由加子が死者として存在している。それに対し、亜紀には由加子のような死者はいない。有馬の思念は深く、亜紀の思念に情感がまわりつくのは仕方がないだろう。

だが、それはそうだとしても、亜紀の思いは普通人よりも深いのは確かであるし、有馬の手紙に触発されて深まっていくのも事実である。彼女が、自分の業を自覚するのも、成長と見なしてもいい。

「錦繡」の宮本文学での位置づけも一視点たり得るが、先行論文の少なさに表れているように、まずは作品そのものを読解してみたい。

次節以降、有馬と亜紀の再会、過去の有馬と由加子、現在の有馬たちへと、有馬を中心にして考察を進めていく。

一 有馬と亜紀の再会

十四通の手紙は、亜紀の手紙―一月十六日付―から始まる。有馬との離婚後、一切の連絡もない十年もの空白を越えて、再婚し母となった亜紀が手紙を書くきっかけは、前年十月の蔵王での偶然の再会であった。彼女は手紙で、蔵王で再会したときの状況や心情を書く。(対して有馬は、七通目の手紙―七月三十一日付―で書く。)

彼女は子供の清高を連れ、東京駅で見た蔵王の写真に惹かれ、思いつままに蔵王を訪れ、ドッコ沼へと登るゴンドラに乗り込む。

有馬は、借金取りから逃げるために、偶然、蔵王を訪れ、宿に残した手帳を取り行くために、強引にゴンドラに乗り込み、亜紀たちに

出会ったのである。亜紀は「心が冷たくなるような偶然」と感じ、有馬は「いつときも早く、あなたの前から姿を消したいと思」った。少ない会話の中で、亜紀は清高のことを聞かれ、「かつて一度も味わったことのないような恥しさに包まれ」、有馬は「身なりの上品な婦人」(亜紀)に対して、自分の状態―「髭も剃らず、汚れた靴を履き、カッターシャツの首筋には垢を付けて、しかも泥のような顔色をしている」(七月三十一日付)―を恥じる。

二人は驚きと恥ずかしさにより、ほとんど会話を交わさず、ゴンドラから降り、別れてしまう。だが、それは終わりではなく、直後から、相手の姿を求めて二人は悩む。

亜紀は十年前の離婚時と同様、有馬と「話し合う必要があった筈でしたのに」と思い、「これでもう永遠に、あなたとお別れしてしまつたように思えて、泣き出したくなるのをこらえつづけ」、有馬の昔と違った様子から、現在のことを知りたいと思う。

再会の晩、亜紀は清高とともに、夜空を眺め、感傷的になる。

ああ、それら星々のなんと寂しかったこととございましょう。そしてそれら星々の果てしない拡がり、なんと途方もなく恐ろしく感じられたこととございましょうか。私は、あなたと十年振りに、突然みちのくの山中で再会したということが、なぜかとても悲しい出来事であったように感じられて仕方ありませんでした。

(一月十六日付)

彼女は旅行後、思い悩みながらも、有馬の状況を知りたいために、また、有馬と自分の寂しさに動かされ、手紙を有馬に出す。

蔵王のダリア園で星を見ていたときの淋しさが、私にペンを取らせたのでございましょう。それは、十年振りに思いがけず再会したあなたの横顔の持っていた淋しさが私にもたらした余韻でもありました。蔵王のゴンドラの中でお逢いしたあなたは、本当に淋しそうでした。

(二月十六日付)

かつて有馬の浮気・心中への怒りや、清高の障害による八つ当たり的な恨みはあったものの、亜紀は有馬に對して、愛情を持ち続けている。蔵王での再会によって、彼女は手紙を書く。この手紙——月十六日付——では言及していないが、亜紀の不幸は有馬との離婚や清高の障害だけではなく、勝沼との結婚生活によっても深まっていた。

有馬も亜紀とのゴンドラでの別れた後の心情を、次のように書く。

(前略)おふたりの消えて行った道の曲がり角を見ました。

その道に降り注いでいる金色の木洩れ陽が、かつて自分の人生で一度も見ただけでもない寂しい荒涼とした光の刃となって、私の汚れた垢まみれの心に突き刺さって来ました。

(中略)

何時間か後に、もう一度あなたの姿を木洩れ陽の中に認めたとき、何か熱湯に似たものが、私の胸の底から噴き出して来ました。亜紀は別の男と妻となり母親になった、そして裕福で元氣そうだ。そう思いました。

(七月三十一日付)

有馬は、現在の生活に満足してはず、失われたものの大きさを実感している。(この時、同棲相手の令子は、大した力になっていないと思われる。)

亜紀も有馬も幸福ではなく、不幸の意識に苦しんでいる。そういう時の再会である。離婚する以前は二人とも幸福であった。十年振りの再会が、両者をして相互の「淋しさ」(不幸)を感じさせ、その回想や原因追及のためもあるうが、手紙によって、自分たちの過去・現在・未来を語ることになる。

二 過去の有馬たち——中学生時代の有馬と由加子——

この節では、中学生時代の有馬と由加子を見ていく。彼が、亜紀への手紙で語る過去は、中学生時代のことである。

有馬の手紙——三月六日付——に、次のように書かれる。

私が妹尾由加子と知り合ったのは、中学二年生のときでした。両親を亡くした私は、最初、舞鶴に住む母方の親戚に引き取られました。

有馬は舞鶴で四ヶ月を過ごすが、そこでの生活で、後年でも覚えているのが強い寂寥感である。

ただ今でもはっきり覚えているのは、初めて東舞鶴の駅に降り立った際の、心が縮んでいくような烈しい寂寥感です。東舞鶴は、私には不思議な暗さと淋しさを持つ町に見えました。冷たい潮風の漂う、うらぶれた辺境の地に思えたのでした。(中略)私はどれほど大阪に帰りたか知れません。けれども、私には帰るところがありませんでした。

中二で両親を亡くし、見も知らぬ親戚に引き取られ、そこが大阪と違う「辺境の地」とくれば、有馬の寂寥感や孤独感も当然と思わ

れる。そういう中で「心ときめく事件」として、同級生の由加子との出会いがある。

短かった舞鶴の生活の中で、私が体験したただ一つの鮮明な事件は、その妹尾由加子という少女への恋でした。(中略)

いま思い出してみても、私の妹尾由加子に対する思いは、思春期の淡い恋心といったものではなく、もっと狂おしいまでの烈しさをともなったひたむきな恋情でした。当時の私の置かれていた特殊な環境を考えると、あるいはそうしたことで自分の淋しさをまぎらわせようとしていたのかもしれない。

相手の由加子は、「あらゆる点で垢抜けておとなっぽく」、「とかくの噂の多い女生徒」であった。

舞鶴という、薄暗い人気のない海辺の街のたたずまいが、私にかえって彼女を取り巻いている風聞を妖しい神秘的なものに高めさせてきたのかもしれない。妹尾由加子に関する淫靡な噂話を耳にするたびに、私の思いはさらにつのつていききました。

そうした罪の匂いのする醜聞は、いかにも彼女にふさわしいとさえ思えるのでした。それほどに、私の目には、彼女は美しく華やかに映っていました。

有馬の恋は孤独感とあいまって、激しいものであったと推測されるし、由加子の「性」が、彼女を「妖しい・罪の匂いのする」ものにしてている。有馬は、舞鶴では「家族」も友だちもなく、孤独であり、大阪でのように愛されていない。当然の如く、彼は愛される、また、愛する対象を切実に求める。

その後、「十一月初旬の、舞鶴特有のささくれだった冷たい風の

吹く日」に、由加子の船遊びに付き合った有馬は海に放り込まれ、由加子も後を追って、海に飛び込む。海から上がり、二人は彼女の家に行き、着替えをし、一時を過ごす。この体験は、由加子の死後、有馬にとって、「ある痛切な感懐をもって思い出してしまふ」ものである。

彼女の部屋は、少女っぽく「幼いつつましやかな雰囲気」であったが、「海水で濡れた黒光りする髪を肩まで垂らして、コンロの熱に頬をかざしている」由加子は、「ある暗さをともなった色香」を放ち、「成熟した女」の姿態を見せる。

人心地ついた有馬は、海に飛び込むことになった原因として、由加子の男に対する媚態をなじるが、由加子は否定し、有馬を睨みつける。

その目はどこことなく悲しげで、いっそう彼女の持つ美しさをきわだたせてくるのでした。そんな彼女を見ると、私はふいにいつもの抑えがたい寂寥感に包まれました。妹尾由加子という少女から発散してくる不思議な暗さは、裏日本の辺鄙な港町のたたずまいと同質なものだったのでした。

由加子と舞鶴の暗さが共振して、有馬はそれらに反発しながらも、彼自身の寂寥感が鮮明になる。その後、由加子是有馬に手を伸ばし額を押しつけ、忍び笑いを洩らす。有馬は陶然とする。

彼女は、以前から少し好きだったけれど、きょう本当に好きになってしまったと囁いて、頬をすり寄せ、唇を這わせました。

由加子の好色性はあるにしても、ここには由加子の好意(愛情)がある。自分のために海に放り込まれたという後ろめたさもあるう

が、転校生としての有馬の魅力もあつたのではない。有馬は大阪という都会からの転校生であり、成績も容貌もいいのではない。田舎の女子生徒が注目したとしても不思議はないし、有馬の自分への恋心にも気付いていたに違いない。だからこそ、つきまとう男の船に共に乗ってくれと頼み、有馬の後を追って、彼女自身も海に飛び込んだのだろう。

後の手紙からも分かるように、有馬は女性に（男性にも）もてる男である。亜紀と離婚後も、「関係を結んだ女も何人もいます。その中には三年も私を食わせてくれた女もいるのです」（七月三十一日付）とあるように、彼の周りには女性がいます。また、星島建設の入社や亜紀との結婚は、亜紀の父親（社長）の眼鏡にかなって、将来の社長候補ということであり、有馬自身の魅力を保証するものがある。

だが、中学生時代の有馬の恋は、彼の突然の転校で終わり、その後の文通もあるが、やがて大学での亜紀との出会い・恋愛・結婚で、彼は由加子を忘れていく。しかし、彼自身が言うように、それは完全な消失ではなく、十数年後の由加子との再会で復活する。

三 有馬と由加子——十数年ぶりの再会と死——

有馬は大学卒業後、星島建設に入社し、やり手の課長として活躍する。ある仕事で舞鶴を訪れた彼は由加子の母と出会い、由加子が京都のデパートに勤めていて、まだ独身だと知らされる。数週間後、そのデパートに別の用事で訪れた有馬は、由加子に会う。

彼女はやがて私を思い出しました。思い出した途端、由加子の表情には十数年前の少女だった頃と同じ雰囲気を持つ笑顔が浮かびました。デパートの制服を着た由加子は、私が想像していたよりもずっと地味な面立ちだったのですが、大きく目を見張って笑うと、そこにあの幾つかの華やかな風聞を招き寄せていた美貌が甦っていました。それは確かに由加子でした。だがどこかに崩れたものを取り入れて成人した女に特有の下司っぽさがない、意外なほど清純な容姿に、私は少し面くらってしまいました。彼女は私を見てしきりに懐しがり、こんな所で立ち話も変だからと、デパートの隣にあるという喫茶店に私を誘いました。（三月六日付）

中学生時代から早熟であった由加子が、二十代後半半になっても、清純な容姿を持つているとはいささか不思議だが、「しきりに懐しが」るあたりに、彼女の有馬への好意が窺われる。その後、由加子はデパートをやめ、クラブのホステスとなり、二人は不倫の関係になる。彼らが、他人の目にどう映っていたか。心中場所である嵐山の「清乃屋」を、有馬が心中事件後、十数年ぶりに再訪した時、女中の絹子は次のように言う。（九月十日付）

この部屋で亡くなられたあのお方は水商売の、それも一流どころのクラブのホステスで、相手の男性はちゃんとした会社の方、それもかなりの働き手であろうと感じていた。しかも男性の方は独身ではなく、家庭を持っているということまで判るものだ。

（中略）

「ばあつと花が咲いたみたいな、おきれいな方どしたえ」。彼女

はそう言いました。男は死ななかつたということ、何ヶ月かたつて人づてに知った。自分は、この旅館の単なるお客に過ぎないあなたたちのことを、なぜか忘れることが出来なかつた。とくに、亡くなった女性の、女の自分でさえ見とれてしまうような美しさが、忘れられなかつた。

高校を卒業してのデパート勤めで、由加子にそれまで恋人がいなかつた訳でもなからうが、有馬との再会時、彼女の顔は「地味な面立ち」から、「あの幾つかの華やかな風聞を招き寄せていた美貌が甦つて」くるとあるように、由加子の美しさは、有馬によつて際だつものかも知れない。つまり、由加子は元々美しいのだが、有馬のように、「狂おしいまでの烈しさをともなつたひたむきな恋情」（三月六日付）を持つ男性に、彼女は反応し、より美しくなれるのではないか。その証拠に、彼女は二十七歳の時点で、結婚もしていないし、恋人もいないようである。それは由加子の美しさの源の一つである淋しさ・暗さを感じするためには、由加子以上の寂寥感・暗さを持つていなければならず、そういう男性との恋愛に彼女は輝くのだらう。

いずれにしても、由加子は有馬を本当に愛していたに違いない。ただ、有馬も由加子に対して愛情は持っていたらうが、不倫中の時点で、由加子ほどのものだったかは疑問である。亜紀への最初の手紙（三月六日付）で、有馬はこう書く。

さらに、あなたの言うように、私と由加子との間に、誰人も立ち入ることの出来ない烈しい秘密めいた愛情というものが実際に存在したのかどうか、いまとなつては曖昧模糊とした、あ

るかなき判らぬ夢のようなものでしかないとも言うしかありません。烈しかったのは、あの舞鶴での少年時代だけのことであつて、由加子と十数年振りに再会してからの私の心には、もはやどろどろとした肉欲だけがうごめいていたとしか思えないふしもあるのです。

確かに不倫中の有馬には、中学時代のような烈しい恋心はないだらう。彼にはかつてのような烈しい寂寥感はなく、亜紀との結婚や仕事に、彼なりに満足している。（この烈しい寂寥感が再び訪れるのは、蔵王での亜紀との再会時である。）

その後、由加子にパトロン候補が登場してきた時、有馬は別れを決意する。

私は由加子との関係がそんなに長くつづくとは思つてはいませんでしたし、どちらかと言えば、早く清算しなければならぬと考えていたくらいです。だが、もう一方では、由加子という女に対する未練も根強く抱きつづけていました。

（七月三十一日付）

心中事件の起こる深夜、由加子はパトロンとなる男に抱かれて、有馬の元に来る。彼の前に現れた彼女は、「中学生のときの、あの舞鶴での夕暮時、濡れた髪を垂らして横坐りしていた由加子」（七月三十一日付）だった。中学生の時は、由加子から有馬に唇を寄せたが、今回は有馬を拒む。

「あしたになったら、私の寝てる間に、帰って行くんでしょ？」私と由加子はしばらく無言で互いの顔を見つめ合つていました。「いつつ帰ってしまうのよね。いつつ、自分の家庭に帰っ

てしまう。私のところに帰って来るなんてこと、絶対にあれへん。」由加子は今度は顔をうなだれてそう言いました。

(七月三十一日付)

由加子の悲しみは、彼女の孤独にあるのではないか。彼女の美貌に男たちは寄ってくるが、彼らは彼女から離れ、「自分の家庭に帰ってしまう」。それは彼女の「性」や暗さのせいかもしれないが、結局、彼女は不幸であり、愛されていないことに通じる。(これは、実は亜紀もそうであり、有馬との離婚後、勝沼にも去られる。)

これで別れようと思いました。私は起きあがって、由加子を抱きしめました。ずっとずっと昔から、由加子は可哀そうな娘だったような気がしたのです。由加子は美しく、誰にもない独特のいじらしさを持った女でしたが、それが由加子を不幸にしていると思えて来ました。(中略) 私はそう言うてから、自分は何もしてやれなかったが、あの舞鶴で初めてお前と逢った日から、ずっと好きだったのだと、正直な気持を伝えました。自分はお前に、恋というものを教えてもらった。そのお返しも出来ないが、そのかわり、もう二度とお前の前に姿を出さないようにしよう。私の中にふたつの心がありました。やはりあぶくみたいに湧いて来る嫉妬、それと安堵でした。これで何のトラブルもなく別れられるという身勝手な安心感が、私を妙におとなぶつた鷹揚な態度を取らせていました。(七月三十一日付)

「何のトラブルもなく別れられる」という言葉に、有馬の身勝手さがある。「自分の家庭に帰ってしまう」という由加子の悲しみに、彼は背を向けている。有馬も自分から離れ、家庭に帰る。男たちに、

結局は捨てられる由加子の悲しみが想像される。しかも、有馬は最愛の男性である。どうやら一流のホステスである由加子は、金銭的な援助を、有馬から受けていないようだし、彼女も金銭を要求してない。彼女は有馬の言いなりに行動している。そんな彼女を「誰にもない独特のいじらしさを持った女」と言う有馬は、やはり身勝手である。

元々有馬は金銭感覚が普通とは違い、後年令子と同棲しても、金銭的には令子に頼っている割には、「おまえを愛していない」などと言う。それが有馬の魅力かもしれないが、いささか大人として未熟である。

(また、この作品で自殺するのは、由加子以外には、令子の祖母の息子・賢介がいる。戦場で縊死した彼の手帳には、「ただひとつこと、こう書かれてあった。『ぼくはしあわせではなかった』」(八月八日付) そんな賢介を祖母は、「最も愛しく、最も不憫な子として(中略)生涯心の中で抱きしめつづけていた」のである。その話の後で令子は、有馬に向かって、「うち、あんたが死んでしまいそうな気がするねん」と言う。有馬も死に近づいている。令子は祖母と同様、有馬の不幸を抱きしめている。だが、有馬には、令子という帰るところがあるし、令子もそれを望んでいる。)

由加子には有馬からの別れの言葉を聞き、死を決意する。「もう二度とお前の前に姿を出さない」という言葉が止めではなかったか。彼女は有馬との無理心中を選ぶ。

四 死後の由加子と有馬

由加子の死後、殺されかけた有馬は幽体離脱し、死にゆく自分(命)を見る。そんな不思議な体験から、変わらなければならぬと、彼は後日、重紀との離婚を決意する。次の引用文は、その時のもの―七月三十一日付―である。

最後の夜、腕の中に抱きしめた由加子の体臭が甦り、私の言葉に、ひとつひとつ素直に頷いていた由加子の子供のような態度が目につかびました。俺が殺したのだ、その思いは私の心にしつかりと根を張って消えることなく、きょうまでつづいているのです。しかし、自分の命というものを見た私は、それによつて変わらなければならぬ。いままでとは違った生き方をしなければならぬ。

だが、その結果はといえば、確かに、私は変わりました。それまでとは違った生き方を試みて、泥のような男に成り下がり、生活疲れを引きずった、艶のないやつれた人間になったのです。

命そのものを見たことは、一つの奇跡かもしれない。だが、それによる変化や「変わらなければならぬ」との思いは、その後の有馬を縛っている。(同様に、重紀も父親から言われた「人間は変わって行く。時々刻々と変わって行く不思議な生き物」(七月十六日付)という言葉に捕らわれる。)だが、外見や状況は変わっても、有馬や重紀たちの気持(愛情)は、基本的に変わらない。しかも、彼ら(特

に、死者)は思い出の中で美化されていく。有馬は由加子の死を忘れることができない。

蔵王で宿泊した夜、部屋で見た猫と鼠の争いは、有馬に由加子との死を連想させる。(七月三十一日付)

二匹の生き物の絡みを見ていると、殺そうとする者と殺されようとしている者との、ぎりぎりのやりとりではなく、心を許し合った者同士、じゃれ合いであるかのように思えてくるのである。(中略)

この十年間、絶えず心から離れることのなかった幾つかの疑問が、そのときまた私の中に起こったのでした。由加子という女は、いったいどういう人間だったのだろう。そしてなぜ自分の首をナイフで切ったのだろう。もしかしたら、俺は由加子を、あの鼠のように扱ったのではなかったか。いや、あるいは由加子こそ、いまの猫そのものではなかったか。(中略)

そんなことをあれこれ考えているうちに、突然私は気づいたのです。猫も鼠も、他の何物でもない、この俺自身ではないかと。自分の生命が孕んでいる無数の心というものの中で、ふいに生じたり、ふいに滅したりしている猫と鼠を見たのだ。

有馬と由加子の関係は、有馬⇨猫で、由加子が単に被害者(鼠)とは言えないということだ。男女の場合、どちらが猫で鼠かは、簡単には言えないが、有馬に従順に見える由加子にも「猫」的要素があったのだろう。(これは令子の場合にも言い得る。有馬に従順のように見えて、仕事に対してはかなりしたたかである。「このときのために、うちはあんたを一年間飼うて来たんや」(九月十日付)

というセリフに、よくそれが表れている。)

また、引用文の後半部分から、死と生、殺される者と殺す者の関係は、観念的に近づく。これと似たことが、亜紀の書くモーツァルトの音楽の「生命の不思議なからくり」、「生きていることと、死んでいることは、もしかしたら同じことかもしれない」(七月十六日付)であろう。令子の祖母も、因果応報的な生まれ変わりを説く。ただ、あまり観念的にしてしまうと、すべてが一色に染まる危険性がある。

有馬はそういった思考と共に、「由加子」を体感する。

その後、令子との仕事を始めた有馬の元に、彼の不渡りの手形を持って取り立てにやって来たチンピラによって、有馬は死を覗き込む。(九月十日付)

令子の震えが激しくなったのを見たとき、私は、それなら仕方がない、俺の命を持って行けと言いました。はったりでも何でもなく、私はもう死んでもいいような気がしたのです。何もかもいやになりました。(中略)

あなたといい、由加子といい、そして令子といい、私と関係する女はみんなひどいめにあってしまう。何もかもどうでもいい、そんな気持ちでした。あなたとの離婚を決めたときも、私はなぜか妙にさばさばした気持ちになったことを覚えています。しかしあの時とは違って、心のどこかに烈しい空しさを感じていました。

亜紀との離婚時には、転落した生活を有馬が未体験であったことと、亜紀が令子のように愛情を示さなかったという違いがある。有馬は、震える令子を前にして「烈しい空しさ」を感じ、死に接近する。

翌朝、令子のアパートを出た有馬は、踏切で死と遭遇する。

近づいて来る電車を見たとき、あつ、電車が来たと思いましたが、だんだん近づいて来る、もうじき俺の前を猛スピードで通り過ぎる。なぜそんなことを考えたのか判りません。ですが、そう考え始めると同時に、心臓も強く早く打ち始め、体中の血が、ざあつと音たてて足先に下がって行くような感覚に襲われたのです。電車はすぐ近くまで来ていました。私は目をきつく閉じて歯を食いしばりました。電車が通り過ぎ、遮断機が上がり、車や人々が動き出したとき、私は隣にいた人のまたがつている自転車荷台をしっかりと握りしめていることに気づきました。私は無意識のうちに、自転車の荷台をつかんでいたのです。近づいて来る電車が視界に入った瞬間から、それが通り過ぎて行ってしまうまでの間に、私の中の何かと何かが、烈しくせめぎ合っていたように思われます。

死のうとしていた彼を救ったものは、生への執着であろう。由加子との場合は、彼女が仕掛けた死であったが、今回は自分自身での死との遭遇であった。

この体験の後、十数年ぶりに心中場所―嵐山の「清乃屋」―を再訪する。彼は死と接近したためか、由加子を思い出す。

私はその由加子の姿を思い出し、本当にもうじき彼女がやって来るような幻想に襲われました。令子の祖母が言った、またこの世で逢えるかもしれないというあの話が、ある真実味を帯びて思い出されて来ました。(中略)

すべての人間が、死を迎えるとき、それぞれがそれぞれの為に

た行為を見、それぞれの生きざまによる苦悩や安穩を引き継いで、それだけは消失することのない命だけとなって、宇宙という果てしない空間、始めも終わりもない時空の中に溶け込んで行くのではなからうか。私は、暗がりの中の、そこだけ青白い光に照らされている床の間に目を注ぎ、浴衣を着た由加子がうつ伏せて死んでいる姿を目の前に見ながら、そんな妄想とも現実ともつかない思いにひたっていたのです。

亜紀がモーツアルトの音楽で感じたものを、有馬は由加子への強い思いと想像力により、現実感を伴って行っている。

しかし、有馬の十年來の疑問―なぜ由加子は死んだのか―は、解決したろうか。有馬は死ぬことの出来ない人間である。亜紀も令子もそうである。なぜ由加子一人が死ななければならなかったのか。それは、亜紀が有馬に言う「だってあなたは、私にとっては、かつてはどんな愚痴も我儘も黙って受け止めて下さったただひとりの人だったのです」（六月十日付）に表れている、相互愛情の対極にある有馬と由加子との「別れ」故であろう。由加子の場合、二度と会わないとの有馬のセリフがそれを重いものにする。有馬は偶然に生きのびたが、由加子は死によつて、「恋」を成就しようとした。たとえ由加子が有馬の想念の中で生き続けるとしても、それは生前の由加子像にすぎない。対して亜紀は手紙によつて、現在・未来へと癒されていく。

似たようなこととして、有馬との文通の終わりは、亜紀にとつて「もつともつとたくさんのものを喪ったような気」（十一月十八日付・亜紀の最後の手紙）にさせるが、その前の有馬からの最後の手

紙の終わりに、「そして、もしかしたら何年か後、私は阪神電車の香櫨園駅で降りて、あの懐かしい住宅地を抜け、テニスクラブの手前にあるあなたの住んでいる家の前に行ってみるかもしれません。そうやって、そつとあなたのいる家を見、あの大きなミモザアカシアの古木を眺めて、またそつと帰ってくるかもしれません。」（十月三日付）とあり、再会の可能性を暗示したのとも読める。

有馬の感覚・記憶の中で由加子が生きているのとは違い、有馬と亜紀は現実的に再会し得るのである。

五 有馬と亜紀―一つの終わり―

有馬と亜紀は手紙のやりとりはするものの、会おうとはしない。有馬は、令子との仕事に未来を見ようとするし、亜紀は勝沼と別れ、清高と共に未来を歩もうとしている。では、二人は、今後、二度と手紙も書かず、再会しないのかと言うと、前節の最後に引用したように、何年後に偶然の再会があるのかもしれない。その時は、蔵王での再会時よりは、それぞれの人生が確かなものになっているだろう。二人の最後の手紙の互いへの祈りは、両者の穏やかな愛情や未来を予測させる。

どうかいつまでもお元気で過ごして下さい。御息が、きつときつと、あなたの願いどおりに成長されますよう、陰ながら心よりお祈りいたしております。

（十月三日付）

私はこの宇宙に、不思議な法則とからくりを秘めている宇宙に、あなたと令子さんのこれからのおしあわせをお祈りいたし

ます。この手紙を封筒に入れ、宛名を書いて切手を貼り終えたら、久し振りに、モーツァルトの三十九番シンフォニーに耳を傾けることにいたします。さようなら。お体、どうかくれぐれもお大切に。さようなら。
(十一月十八日付)

両者の愛情と祈りが未来に向かう時、彼らは未来に向かつて歩み続け、小説は静かに終わりを迎える。

が、注意すべき一つに、亜紀の手紙にある「モーツァルトの三十九番シンフォニーに耳を傾ける」がある。モーツァルトの三十九番シンフォニーについて描かれるのは、喫茶店「モーツァルト」が火事で焼けた夜のことである。(七月十六日付)

私はベッドに横になり目をつむりました。いつしか心の中からは、炎も、木のはぜる音も、御主人の姿も消え、あなたと初めて逢った大学時代の夏の日の木陰の涼しさ、あなたと手を握り合って何度も行きつ戻りつした御堂筋の車のテールランプのうつろな光、父からあなたとの結婚を許されて、嬉しさのあまり行く先も決めず阪神電車に乗った日の、車窓から見えていた神戸の海のどろりとした輝きなどが三十九番シンフォニーと渾然と解け合って、あるおぼろな、言葉にならない思いに包まれて行きました。そうしているうちに、さつき御主人の言った宇宙の不思議なからくり、生命の不思議なからくりという言葉の秘めている何物かを、私はほんの一瞬理解出来るような気がしてきました。

この曲を聴くと、いつも有馬との過去が甦る訳でもなからうが、この曲は彼女を過去に連れ戻し、有馬との過去を体感させている。

(あたかも、有馬が「清乃屋」で由加子を体感したように。)

亜紀は、有馬との文通を絶った悲しみを味わいつつも、記憶の中で彼と共にあるのだろう。それが彼女にとって癒しになっている。少なくとも、彼女は有馬から来た手紙を生涯抱きしめるに違いない。手紙に書かれたことは、一つの現実であり、しかも、読み直せることによって、未来においても、現在ととなり得る。有馬も同様である。手紙によって、由加子や亜紀、令子ですら、現在に生きるのである。

「錦繡」という小説が輝くのは、死と生の相互の関わり合いが濃厚なこと、かつ、それらに絡む過去と未来が、相互に重なり合う可能性を持ちつつ、存在していることにある。

本稿ではあまり取り扱わなかった、亜紀の心情や勝沼との関係、また「宿命」や「業」等については、別に論じてみたい。

注1 「宿命と永遠―宮本輝の物語―」(おうふう 平成十五年十月)

2 「『錦繡』の祈り」(『宮本輝論』翰林書房 平成十年九月)

3 「宮本輝『錦繡』論のために―亜紀と靖明・二つの平行線―」(兵庫教育大学近代文学雑誌)17 平成十八年一月